

- ◆事業名 : 学習支援ボランティア事業
- ◆新宿区 (子ども家庭部子育て支援課育成支援係)
- ◆キーワード : 『学生ボランティア』
- ◆事業ポイント

- 母子生活支援施設を退所した中高生を主体に、福祉事務所から紹介の地域児童を受入。
- 大学生ボランティアを積極的に活用することで、高校生の進学意欲を高めている。
- 心のケアの場とするだけではなく、高校や大学への進学を目指す意識、意欲を高めることを重視。

◆事業の概要

項目	内容
①世帯数・面積	204,362世帯 (H27年3月1日現在)、18.22km ²
②児童扶養手当受給者数	1,666人 (H26年3月末)
③開始時期	平成25年4月1日
④対象年齢	中学生、高校生
⑤事業対象の要件等	母子生活支援施設「かしわヴィレッジ」入所者 (入所経験者) および福祉事務所からの要請者。定員は設けていない。
⑥実施体制	委託 (新宿区社会福祉事業団に委託)
⑦スタッフ	委託先の1名 (学習全体のコーディネーター) ※他に2名のパート契約者が学習支援を実施
⑧事業形態	教室方式
⑨事業内容	学生ボランティアによる中高生を主体とした学習支援
⑩実施場所	1か所 (送迎無し)
⑪実施頻度	毎週水曜日 : 18:00-21:00 毎週土曜日 : 13:30-18:00 ※夏休み期間や高校入試前は、連日授業も実施している
⑫ボランティア登録数	9人 (すべて学生ボランティア)
⑬児童数	20人 (小学生 : 1人、中学生 : 9人、高校生 : 10人)
⑭事業費 (H26年度)	830,480円 人件費 (コーディネーター及び学習支援のパート契約人員)、書籍代 (中高生のテキスト)、雑費 (おやつ代、行事代)

◆事業経緯

学習支援ボランティア事業の委託先である新宿区立かしわヴィレッジ (平成7年事業開始の母子生活支援施設) では、高校や大学への進学を希望するすべての子どもたちに、その機会が平等に与えられるよう、開設当初から施設職員によって、中学生を中心とする入所・退所児童を対象とした無料の学習塾を開設していた。

平成18年からは地域の子どもたちも受け入れることにし、「かしわ塾」と命名することにした。受入児童が増えたことで、ボランティア講師を採用するようになった。

新宿区では、平成25年度より学習支援ボランティア事業を行うに当たり、もともと当該事業を行っていた「かしわ塾」に指定管理者制度の下、委託することを決定し、現在に至っている。

なお、「かしわ塾」では、それまでは国の機能強化推進費10万円を資源に運営してきたが、新宿区の学習支援ボランティア事業として運営予算が増えたことから、ボランティアに対する交通費支払いなど、以前よりも充実した事業体制を築けるようになってきている。

◆具体的な事業内容

[事業対象者]

事業の対象者は、かしわヴィレッジ入退所の中
高生及び地域のひとり親世帯、生活保護世帯の中
高生である。（その他、相談に応じ高校程度の学
習支援を必要としている人も対象としている）

DV など家庭の事情で保護を必要とする母子家
庭を受け入れているかしわヴィレッジは、入所期
間 2 年が基本であり、2 年を経過すると退所して
各々の居住地で生活する形となる。

入所中の子どもは 0 歳から 12 歳までが多く、
退所後の中学生、高校生という学習期に「かしわ
塾」に来て、学力の維持や、高校、大学の受験に
向かうために授業を受ける児童が中心である。

平成 18 年からは、福祉事務所からの要望もあ
って、地域のひとり親世帯の中高生（不登校や引
きこもり児童が多い）も対象に授業を行っている。

対象者の年齢に制約は設けていないが、小学生
については施設内学童保育で対応する環境があり、
また塾を開催する教室のスペース的な問題もあ
って、対象はほぼ中高生に限っているのが現状であ
る。

[教室方式]

「かしわ塾」は、かしわヴィレッジ内にある集
会所 1 か所で開催している。

対象児童となるかしわヴィレッジ入退所者や地
域の子どもは、DV の目撃や虐待経験による心に
傷を負った児童、または何らかの理由により不登
校や引きこもりとなってしまった児童であり、孤
立感から脱却させることも重要と考えている。学
習支援においては単なる学習の場ということでは
なく、皆が集える場であるという点が重要である
ことから、派遣方式は採用せず、教室方式のみで
の実施としている。

[教室風景]



出典：かしわヴィレッジ

[学習科目]

- ・小学生：遅れていると思われる科目、本人が希
望する科目（必要に応じて対応するが、
実質的に小学生は対象としていない）
- ・中学生：全教科
- ・高校生：全教科（可能な限り理数の数学、物理）

高校中退後の最終学歴が中卒となってしまう高
校生に対しては、“高校を中退させない”ことに
主眼を置いていることもあり、高度な科目の学習
支援は重視していない。しかし、生徒の中には偏
差値の高い理系大学を目指す者も出始めており、
その学習支援を行う人材の不足感が否めなくな
っている。学習支援ボランティアの中には近隣に所
在する早稲田大学等の理系学生がいることから、
今のところは大きな問題となっていない状況であ
る。

[送迎]

特別な理由を除き、送迎は行っていない。

かしわヴィレッジを退所すると、都営住宅に住
居を持つ家庭も多く、電車や自転車を使って他区、
他市から 1 時間程度かけて通ってくる中高生が 3
~4 人いる。

[利用料]

利用料は徴収していない。

[おやつ/食事]

おやつは提供しているが、徴収はしていない。

おやつを提供するのは、基本的に土曜授業のと
きであり、みんなで同じ時間におやつを食べてい
る。水曜授業は、おやつの提供は行っていない。

食事については月 1 回の食事会を開催するほか、
子どもから空腹を訴えられた場合に必要に応じて
提供することもある。食事代の徴収はしていない。

[ボランティアへの謝金等]

学習支援ボランティア事業を始める前までは、
国の機能強化推進費 10 万円で賄わなければなら
なかったため、ボランティアには 3,000~4,000
円の上限を設けて交通費を支払っていた。当事業
となってからは予算が増えたことから、ボランテ
ィアには交通費を実費に近い形で支給している。
（ボランティアへの謝金支払はなし）

[親に対する学習支援]

かしわヴィレッジ入退所者の親に対しては、通信教育により高卒資格取得を支援する「ママ塾」を開催している。これは、通信教育で提出する科目内容について、来所して教室で学習し（職員やパートが学習支援）、高卒資格の取得を目指しているものである。現在は1名が受講しており、まもなく卒業の見込みである。

◆支援内容

[学習指導]

ひとりひとりの学習状況に合わせた学習プランを立て、わからないことをそのままにしないよう支援することを指導方針としている。

「かしわ塾」は、1箇所の教室で水曜日と土曜日の週2回開催している。コーディネーターが子ども一人ひとりの学力や希望等を配慮してボランティアを配置する。例えば高校生では、通常の授業についていくことを目的とする生徒と、大学進学を目指す生徒に分かれるが、大学進学希望者には大学進学の部を設け、大学入試に向けた学習指導を実施する体制を取り入れている。

[ボランティアと生徒の比率]

ボランティアと生徒の比率は、1：1が理想と考えているが、水曜日授業ではボランティア2人に対して生徒が4～5人、土曜日授業ではボランティア3～4人に対して生徒が10人強というのが実態となっている。「かしわ塾」では学習支援のパート契約者2名を採用していることから、パートを含めると、概ね1：2～3といった割合である。

なお、毎回同じボランティアが参加できるわけではないため、学習支援ボランティアと生徒を固定することはできないが、できるだけ同じボランティアが同じ生徒を教えられるよう調整している。実際は生徒からするといろいろな先生（ボランティア）に教わることになるが、生徒の学習進捗状況等はコーディネーター（職員+パートの2名）が把握し、各ボランティアに引き継ぐことで、一人ひとりの学習状況に合わせた学習プランを実行できるようにしている。

[進路相談]

都立高校入試に必要な内申点の計算や、併願受験における私立高校の選定、学習計画の作成等、進路に関する相談に対応している。

当塾の進路相談では、生徒本人の希望を確認し、それを尊重することで、学習意欲を高めるようにしたいと考えている。

また、当塾の生徒は、学校での先生との関係が良好と言えない場合もあり、相談できる環境が整っていないため、親身になって相談を受けるということも当塾の重要な役割と考えている。

[教材]

教材としては、学校の教科書のほか、市販の教科書、問題集、参考書を使用している。

必要であれば個別に専用のワークを用意し、1冊やり遂げる体験をさせることで、学習習慣や学習意欲の向上を図るようにしている。

◆事業実施体制

事業は、新宿区立かしわヴィレッジに委託している。

かしわヴィレッジは、定員10世帯の日本で最も小さな母子生活支援施設であり、施設入所者や退所者児童を対象に、約20年前より独自に無料学習塾を開催してきた。約10年前からは大学生のボランティア講師の採用も開始しており、その土台があったことから学習支援ボランティア事業の委託先に決定した。

新宿区としては運営資金の提供を行い、学習塾の運営は、かしわヴィレッジに全て任せている。

かしわヴィレッジが実施する「かしわ塾」は、職員1名が学習全体のコーディネートを行うほか、パート2名がコーディネート業務と学習支援業務を補完する体制で運営している。

◆ボランティアの確保・養成

ボランティア登録人数は、現状9人で全員が大学生である。

学生ボランティアのうち、一人はかしわ塾出身者であるが、それ以外は一般に募集して確保できた学生となっている。実際には年に2～3回ほど顔を出してくれる大学の先生も一人いるが、ボランティアは学生を基本とするようにしている。

大学生ボランティアが多い理由としては生徒が年の近い大学生と触れ合うことにより、大学への進学意欲の向上や、大学生活に対するイメージを持ちやすくすることの意味が大きいと考えている。

[ボランティアの募集]

かしわヴィレッジでは複数の大学から実習生を受けている。その実習生にボランティアを依頼したり、福祉系の大学の授業の中でかしわ塾をとりあげてもらったりして、ボランティアを募集している。

[協力大学等]

学生ボランティアの在籍校は、「社会事業大学」、「立教大学」、「早稲田大学」、「慶応大学」、「東洋大学」などである。

前述のように、実習生やこれら大学の学生に対し、大学の授業の中でボランティア協力を呼び掛けている。また、既にボランティアとして参加してくれている学生に、友人や後輩を勧誘してもらう形でボランティアを確保しているのが現状である。

なお、応募者には事前体験を数回実施してもらい、適性を判断するとともに本人の同意を経てボランティア登録を行う流れとなっている。

適性判断といっても高いハードルを設けてはならず、一般常識や守秘義務等を守るモラルの持ち主であれば採用することにしている。

[ボランティアの人材育成]

かしわ塾では、どんな事情があろうと待つてはくれない受験勉強という苦勞に寄り添うことで、職員やボランティアが、こころのケアや子ども期の回復に不可欠な「重要な他者の存在」となることを目指している。しかし、子どもたちが抱えている家庭の事情や壮絶な過去に触れたボランティアは、今やるべきことは、受験勉強より子どもたちのこころのケアや子ども期の回復ではないかと考え、悩んでしまうケースが多い。

こうしたボランティアの悩みに対し、個別面接を不定期であるが実施している。個別に面接することによって、こうしたボランティアの心の揺れや戸惑いに配慮し、また、ボランティアの報告から、年代が比較的近いボランティアにしか見せない子どもたちの本音や現状に職員が触れることも可能となる。

かしわヴィレッジでは、ボランティアや実習生のために、活動実践の報告だけではなく、活動前の不安感や活動後の感想等を記録するスタッフノートを設けている。記録には、職員からのフィードバックのコメントがあり、それに触れることによって、活動前のボランティアの不安感の軽減に

繋がっていくと同時に、ボランティア自身の実践の振り返りも可能となっている。

◆参加者の募集

参加者の募集方法は、入退所児童への直接告知（退所時に中学や高校生になったら「かしわ塾」に来たら良いという声掛け）、生活福祉課との連携による相談員からの紹介が2本柱である。

なお、学習支援を行う場所は、かしわヴィレッジの集会所1箇所（30～40㎡くらい）だけのため、収容できる人員数が限られていること、また複雑な事情を持つ子供が多いことから、家庭的な雰囲気を大切にしたいとの思いがある。そのため、あまり積極的にPRして人数を集めることはしていないのが実態である。

◆事業の実績

現状の実質的な参加者は、19人（中学生9人、高校生10人）である。

定員は特に定めてはいないが、登録児童は通常20～30人となっている。

[学習参加状況]

出席率は、中学生で80%、高校生で70%程度となっており、比較出席率は高い。（塾は水曜と土曜の週2回開催しているが、平日の水曜日は出席者が少なく、生徒は土曜日中心に出席している）

生徒は、かしわヴィレッジの入退所者と福祉事務所からの紹介による地域の子どもの大別されるが、入退所の児童は比較的継続的に参加するものの、地域の児童は母子生活支援施設の雰囲気を知らないことから、慣れるまでに時間がかかることもある。そういった際は基本時間外での参加を呼びかけ、来やすい環境を整えるように心がけている。

◆事業立ち上げに関して

[教室等場所の確保]

独自に無料の学習塾を開設していた、かしわヴィレッジに事業運営を完全委託したことから、従来から使用していた当施設内の集会所をそのまま教室として利用している。

[他施策との関連]

生活保護を担当する生活福祉課との情報共有は行っている。

無料の学習塾とは、利用生徒の紹介等を実施している。

◆事業の効果

事業の効果としては、高校進学率 100%、大学進学への意欲拡大、学習習慣の定着が挙げられる。

高校生に対しては、「中退させない」ことを念頭においているが、生徒全員が高校を卒業できるようになったことが最大の成果と考えている。

参考：かしわ塾の高校・大学合格者数

	合格者人数
平成21年度	高校7名、大学0名、高卒認定試験2名
平成22年度	高校5名、大学1名、高卒認定試験1名
平成23年度	高校5名、大学0名
平成24年度	高校2名、大学3名
平成25年度	高校8名、大学3名

◆当事業への意見や考え方

[本人]

『かしわ塾に出会ってなかったら大学に行こうと思っていなかった』

『勉強は分かると楽しいが、一人ではやらないからかしわ塾があって良かった』

[親]

『かしわ塾のおかげで都立高校に合格できた』

『声をかけるまでもなく、子供が進んでかしわ塾に行きたがっている』

[委託先]

貧困にあえいでいたり、心に傷を負ったりした児童一人ひとりには、本音を言える場所が必要である。基本的に誰もが高校や大学に行きたいはず

であるが、家庭の事情を考慮して、「行きたくない」と言ってしまう児童は多い。このような本音とは異なる意思を言わざるを得ない背景をきちんと理解し、本心を見抜きながら学習支援していくことが重要な点であると考えている。

[ボランティア]

『勉強をする習慣がなかった子に学習習慣を身に付けてもらうには、時間が必要』

[自治体自身の事業評価]

心のケアに向き合った事業として重要と考えている。予算のつく限り実施していきたい事業である。

例えば東京都ひとり親家庭支援センター「はあと」でも、児童に対して無料学習塾を提供しているが、参加者の中には「ひとり親の子供だけ集まって、無料で優遇されていいのか？」との懸念が生まれるのではないかと思う。「かしわ塾」の生徒は、大半がかしわヴィレッジ退所者であり、当施設の事情を知っている者同士であることから、うまくいっていると考えている。

◆現状の課題

継続した学習ボランティアの確保が課題としてある。特に理系のボランティア人材の確保が課題との認識がある。児童の中には、有名大学を目指せるような優秀な生徒も出てきており、理系の高度な科目を教えられる人材を確保するのに苦労している。

現在は早稲田大学の理系の学生がボランティアに来てくれており助かっているが、学生は卒業してしまうとボランティアには来てもらえないため、継続的に確保していくことが難しい。

◆今後の目標

今後の目標としては、高校に通い続けるための支援の充実、具体的には高校中退者ゼロを継続していくことを目指していく考えである。